

LCCとタイの僧侶

● 放眼日中



もう十数年ほど前になるが、マンマのヤンゴンから地方へ向かう国内線には、三つの行き先を巡回する便があった。どの空港に先に行くのかは、その日に誰が乗るかで決まるといふ、日本ではまるで考えられないようなフライト。偉い政治家、軍人が乗ることもあっただろうが、筆者が遭遇したケースでは高僧が一番前に乗っており、彼らの行き先が最優先された。

僧侶の地位の高さを見ると、やはり上座部仏教の世界は、日本、中国の仏教とは大きく違うな、と強烈に感じた。

先日、那覇空港からタイのバンコクまで格安航空会社（LCC）を使って旅をした。乗客の80%以上がタイ人であり、年間100万人に上るタイ人訪日客の一端を見たが、タイらしい風景として、搭乗者の中に袈裟を着た2人の僧侶がいた。だが、

彼らは優先的に対応されることもなく、自動チェックインを自ら行い、うまくできないとまた行列に並んでカウンターで手続きをしており、タイ人乗客もそれをただ黙って眺めていた。

実は、タイでも僧侶は敬意を払われ、優先的に対応されるところを何度も目にしてきた。空港に行けば待合室には僧侶専用の椅子があり、優先搭乗もされていた。機内でも、前の席が空いていれば当然のようにそこに案内されていた。バスなどでも、僧侶が乗って来れば、人々は前の席を即座に空けて座らせていた。知り合いのタイ僧侶から「タイ航空の国内線で、クルー一同からといってお布施を渡されることすらある」と聞いたことが印象に残っている。沖繩のケースは国外だからそのような対応はなかったのだろうと思っていたが、その後LCCでタイ国内

を旅した時、目を疑うような光景に遭遇した。機内は約半数しか席が埋まっていなのに、なぜか筆者の横にタイ僧侶が座つたのだ。よく見ると一番前の席も空いているし、なぜキャビンアテンダント（CA）はそこへ誘導しないのだろうか。そして、なぜ他の乗客はそれについて何も言わないのだろうか。

僧侶への振る舞いに慣れていない外国人として、かなり緊張した。実際、CAが僧侶に水を渡す時、わざとわざと筆者のテーブルを出してそこに置き、それを僧侶が取るという儀式のようなことが行われた。僧侶は女性に触れてはいけないし、直接手渡しするのとはばかられているのだ。LCCでは一番前の席などは座席指定料を取られ、今回のケースは僧侶自身が無料の座席指定をネット予約したのだろうが、僧侶に席を選ばせること自体が仏教的にはどうかと



コラムニスト・アジアウォッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

さえ思えた。やはりタイでは、席が空いていれば僧侶を前に座らせる方がフライト自体に落ち着きが出るように思うのだが、どうだろうか。

特に、僧侶と女性の接触を避けるという意味でも、誰が隣を指定するか分からないネット予約は困るのではないかとも思った。だが、旅行会社の人に聞くと「タイ国内線には性別の表示枠に『僧侶』があるはずだから、今回のケースは男性が隣だと分かっていたので、そのままとなつたのでは」と説明された。

「近年のLCC台頭がタイ人の宗教観に変化を与えているのか」などと大げさに言うほど、タイ仏教を理解しているわけではないが、何となく「ある種の変化」を感じざるを得ない出来事であったことには違いはない。